

## 諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態

ここに私が述べて見たいのは、主として唐音資料に反映した所の、鎌倉時代の國語の音韻状態である。

鎌倉時代の唐音資料としては、當時の文獻に見える唐音語彙は勿論重要には相違無いが、その数が極めて僅少である。それらに比すれば、質の正確さに於ては勿論劣るが、量に於て豊富なものに、禪宗寺院で諷經に用ゐられる唐音がある。言ふまでもなく、それらは久しい間口から口へと傳誦されて來たものであり、文字に書き留められたのは、大部分は江戸時代に入つてからのことである。その音韻状態は既に全く日本化して居り、無論傳誦の間に生じた訛も少からず混じてゐることは思はれるが、これは陀羅尼なり回向文なりの全文を唐音で誦するのであるから、單語の場合の如く斷片的ではなく、その傳來時代に於けるその支那方言の音韻組織の全貌を髣髴たらしめるに足るものがある。従つて、一般の經文讀誦の吳音や天台・眞言兩宗所傳の漢音などと等しく、國語及び支那語の音韻史料としては極めて重要なものであるのに、その言語學的研究が今日まで等閑に附せられてゐたのは遺憾なことである。

今その資料の主要なものに就いて略説しよう。それには先づ清規類の一群がある。その中、臨濟關係のものとしては、諸回向清規式五卷及び小叢林略清規三卷がある。

諸回向清規式は、明曆三年に刊行されてゐるが、本文の終に永祿太歲<sup>註二</sup>丙三月吉辰永源遠孫現住天倫比丘楓隱<sup>註一</sup>とあり、これが著者の奥書であらうと思はれる。明曆版ではなほその後<sup>註三</sup>に保寧勇師示看經・義淨三藏誠看經・中峯和尚座右銘。

大惠禪師發願文を附載してゐる。現今、書肆で求め得る新刷本も、版木は同一と思はれるが、ただ、目錄<sup>註四</sup>の最終の二

枚を別筆で書き換へ、且附録全部と明暦三年梓行の刊記とを削除し、その代りに謹彫諸回向清規云々皇都京極街書林友松堂常信謹誌の文字を入れてゐる。

小叢林略清規は、無着道忠の撰で、貞享元年の自序がある。刊本は、その終に龍華藏版と記す。道忠は、洛西花園妙心寺山内龍華院の第二祖で、寶永四年勅旨を以て妙心本山の住持職に補せられた。天資穎敏、博覽強記にして、一代の著書六百六十有一卷に及ぶ。中にも、禪林家器箋の如きは、唐音研究者にとつて缺くべからざる参考書である。

次に、曹洞關係の資料としては、永平道元禪師清規二卷・瑩山和尚清規二卷・洞上僧堂清規行法鈔五卷がある。

永平道元禪師清規は、道元の遺著たる六部の書、典座教訓・辨道法・赴朝作法・衆寮清規・對大己法・知事清規を集めたものである。寛文七年、永平寺第三十代の智堂光紹が適之を蠹簡の内に得て刻せしめたが、此の版には唐音の振假名は附せられなかつた。後世流布する所の本は、寛政六年刊行の「冠註永平道元禪師清規」である。これは、即中玄透が穩達に依囑して舊版を校訂せしめたもので、その中、赴朝作法所載の諸回向文並に十佛名には、唐音の振假名が附いてゐる。本書は、通常は單に永平清規と略稱せられ、又後に玄透自ら著す所の吉祥山永平寺小清規と區別するために永平大清規と呼ばれることもある。

瑩山和尚清規は、僧堂清規凡例に據れば刊本三種あるとのことであるが、流布する所は延寶九年の版で、大乘寺の卍山道白の校訂したものである。分つて上下二卷となし、別に坐禪用心記をも附載してゐる。かつて大乘寺の住持月舟が之を古篋の中に得て一堂の中に行はしめてゐたものを、卍山が謄寫して梓行した。併し、それには誤が少くなかつたので、その後更に好本を得て對校し、略至當に歸するを得て、再び發刊せしめたものであることは、卍山の延寶六年序によつて知られる。

洞上僧堂清規行法鈔は、瑞方面山の著す所で、寶曆元年の自序あり、同三年に刊行されてゐる。外題には「洞上僧堂清規」とある。その後、寶曆五年、新に考訂三卷を添へて再刊された。面山は若狹空印寺の前住で、著書は甚だ多い。禪家の清規類としては、これらの刊本の外に、なほ寫本として傳へられた有名無名の書が多數に存することは、僧堂清規の凡例や駒澤大學圖書館編「禪籍目錄」などを見て知られる所である。私の所持する寫本の一つに、「大乘維那口傳」と題するものがある。巻頭に相樹林大乘護國禪寺維那謹誌と記し、同寺の諸儀式の作法を説明したものである。又、瑞鹿山圓覺寺で行はれてゐる諸回向の文を集めた本がある。書名は明かでない。終に鹿山中松嶺院周超主と記入してゐるのは、多分所持者の名であらう。これらは唐音資料として有益なものである。

その他、個々の儀式に關する軌範を記したものとしましては、觀音懺法・施餓鬼・洞上唱禮法等の書がある。

<sup>註五</sup>觀音懺法の諸本を擧げるについては、勤行用の譜本と註釋書とを區別しなければならぬ。註釋書とは、例へば寛文三年村上平樂寺開版の本の如きがそれである。この本は、まづ懺法之起と題して觀音懺法の由來を漢文で述べ、次に本文を出して、同じく漢文で註釋が施してある。併し、唐音資料として役立つのは、左に擧げるやうな勤行用の譜本の一類である。

觀音懺法の譜本は、相當に古くから現れてゐる。古寫本としては、かつて弘文莊待賈古書目第九號に寫眞の出た室町時代の寫本「觀音懺儀」一卷（未見）あり、私は南嶺和尚眞跡と傳へる「懺摩法」一冊を藏してゐる。これらには、いづれも本文に譜を附け、且唐音の假名が振つてある。現今書肆で新刷本の求め得るものとしては、臨濟關係のものに花園校本あり曹洞關係のものに大乘寺讀點本及び秋葉寺藏版本がある。「花園觀音懺法」は、妙心寺塔頭春光院の性堂智適が寛保三年に妙心寺所傳の譜に據つて上梓し世に行はしめたものが、未だ久しからずして寢に漫滅し所在の患

ふる所となつたので、天明三年改めて一本を繕寫し刊行したものである。大乘寺讀點本「觀音懺法」には、享保十五年の序と明和八年の跋とがある。前者に據れば、本書は洛師の削生林氏嘗て刊する所の大悲懺を刪補翻刻したものであるが、私が別に所持する所の京洛桃花街書林林氏の序ある刊本はその原版かと思はれる。さて、享保翻刻の版は、その後寶曆五年に重刻されたが、歲月を歴て蠹損したので、京都の書賈好文軒が越前禪林精舍寓住の香外石蘭に就いて校正を求めた。そこで石蘭は先師傳來の正本を與へ、重刊流通せしめたのが、即ち明和九年版である。その後寛政八年及び文政十三年に改刻せられ、明治以後にも版を重ねて、現今もその宗門に廣く行はれてゐる。江戸時代及び明治時代に於ける此の系統の刊本の題簽を見るに、「大乘寺讀點付」と記したものがあり、現に書肆でも大乘寺版と稱してゐる。秋葉寺藏版本は、「明治<sup>註一</sup>新刻觀音懺法」と題し、天保十四年秋葉山叟泰礎の序文は有るが、唐音の振假名は明治十七年白鳥鼎三の附する所である。右の外、私の所持するものに、文久二年刊行の南禪寺藏版本あり、これは寶永三年の版を翻刻したものである。これらの外に、なほ面山の校訂した本の存することは、僧堂清規の中に著者自ら言つて居り、又駒澤大學圖書館編「禪籍目錄」にも「重修<sup>改訂</sup>觀音懺法、一、瑞方(面山)」（未藏書）として出てゐるが、私は未だ見る機會を得てゐない。

觀音懺法の譜本には、多くは陳白の本が附いてゐる。もつともその内容は本によつて多少相違してゐる。

花園 校本 祈禱陳白・祈禱小回向・檀忌陳白・檀忌小回向

大乘寺讀點本 祈禱陳白・祈禱小回向・亡者陳白・亡者小回向・亡者回向・祈禱回向

秋葉寺藏版本 祈禱陳白・祈禱小回向・亡者陳白・亡者小回向

但し、檀忌陳白は亡者陳白と同一物であり、檀忌小回向は亡者小回向と同一物である。右の中秋葉寺藏版本の「陳白」

は、白鳥鼎三の校正する所であるが、全部訓讀するやうになつてゐるので、唐音資料にはならない。花園校本の「陳白」は、寛政元年に翻刻した本が、年を歴て殆ど漫滅に至らんとしたので、安政六年、花園の某尊師に校正を請ひ、更に梓行したものである。大乘寺讀點本の「陳白」は、寛政八年版の奥附に據れば、明和九壬辰初春吉且洛之洞院古稀翁永田右京謹書並畫とある故、遅くとも明和九年に觀音懺法の改版された際には既にそれに附いてゐたものであり、且本文と同筆で上梓されたものと見える。なほ、私の所持する一本は「重陳白」と題し、題簽の下部に「大乘寺讀點付」「富版」と印刷してある。版の體裁から見ると、明かに明和改刻以前のもので、恐らく寶曆版か或は享保版の觀音懺法に附屬してゐた本であらうと思はれる。既述の傳南嶺真跡本「懺摩法」も、後半は右諸本の陳白に相當する部分で、修正陳白・修正小回向・祈禱陳白・祈禱小回向・尊宿陳白・尊宿小回向・亡者陳白・亡者小回向・逆修陳白・逆修小回向を含んでゐる。なほ、面山の校訂した觀音懺法にも陳白の本が附いてゐることは、僧堂清規の記載によつて知られる。諸回向清規式卷第五にも、懺法陳白小回向之部がある。

次に、施餓鬼の念誦を記した折本類としては、花園校本「施餓鬼」一帖、永平寺藏版「施食法」一帖、平井文永堂藏版「大施食」一帖等あり、私の見たものは何れも新刷本である。その中、花園校本は、かの觀音懺法と同じく春光院の智適の傳ふる所に據り、それから三傳目の曉敬が文化八年に上梓したものである。「新施餓鬼並念誦」一帖、これは江戸時代の刊本で、題簽の下部に「大乘昌引」と記してあるから、大乘寺所傳の作法であらう。なほ、諦忍著「益供施餓鬼問辨」(明和二年自序、同六年刊)の中にも、禪宗大施餓鬼作法を載せ、唐音の振假名を附けてゐるが、著者は眞言宗の僧であつて、禪僧ではない。

「改正 念佛 洞上唱禮法」一帖は、面山の撰で、寛延三年の自序あり、翌年梓行されてゐる。單に部分的に唐音資料を含

む經本類としては、その他にもなほ折に觸れて管見に入るものが少くない。

次に陀羅尼類であるが、禪宗寺院で最も頻繁に誦せられる首楞嚴神呪・大悲圓滿無礙神呪・消災陀羅尼の三つを收めて一帖の折本としたものが有る。私の所持するもの三種。その二つは新刷本で、外題は「花楞嚴咒大悲咒消災陀羅尼」となつてゐる。その他の二本もこれと略同じ内容と體裁とを持つものであるが、並べて對照して見るに、版木は三者各相違してゐる。同一系統の本が次々に幾度か改刻されたものであらう。「禪林日用陀羅尼集」一帖、これは江戸時代の刊本で、淨口業眞言以下數十種の陀羅尼を收めてゐる。この種の陀羅尼集は他にも幾種か出てゐるやうである。

宋の長水の子璿が著す所の首楞嚴義疏注經（十卷）は、夙に曆應二年高師直によつて上梓され、室町時代にも所謂五山版として幾度か出版された。江戸時代に入つては、寛永九年中野道伴によつて發刊されて以來、正保五年・明暦元年・延寶八年・天和三年・貞享五年と版を重ねてゐる。所謂首楞嚴神呪はその第七卷に含まれてゐるものであるが、寛永版以來之に唐音の振假名を附してゐる。その振假名には、現今禪宗諸派に行はれてゐる誦法とは異なるもの少からず、又ホの假名として口の字體を混用するなど、その傳來の古いことを思はしめるものがある。なほ、寛文六年版「首楞嚴經合轍」（十卷、明僧通潤編）、明暦四年版「首楞嚴義海」（三十卷、宋僧咸輝編）、天和三年版「蠶頭首楞嚴義疏注經」（十一卷）、刊年不詳「首楞嚴義疏集註」（二十卷、浪華沙門天龍編）等に於て首楞嚴神呪に附した唐音の振假名も、寛永版系統のものを踏襲してゐるものらしく見受けられたが、未だ正確に對照して見たわけではない。

「異譯心經」は、般若心經の七種の譯を集めたものである。私の所持するものは寶曆十四年の再刻本で、終に水戸沙門探盈による寶曆十二年の重彫梵漢心經後序が附いてゐる。七譯の第二、玄奘譯般若波羅蜜多心經の後に、此本雖

有「宋音」傳寫久而韻聲不「明故今除」之と記し、本來存したらしい宋音の記載を削除してしまつてゐるのは、學術上遺憾なことである。但し、七譯の後に、般若心經梵本二種、及び宋蘭溪大覺禪師將來梵語心經を附載してゐる。その中、大覺禪師將來梵語心經は、漢字を以て梵語を音譯したものであり、その全文に唐音の振假名が附いてゐて、有益な唐音資料となるものである。(梵語心經は元祿六年刊「大覺拾遺錄」にも收められてゐる。)

虎鬪師鍊の聚分韻略(後には改編されて三重韻とも稱せられた)は、前記の首楞嚴義疏注經と同様室町時代から版を重ねてゐるものであるが、東京帝國大學國語研究室所藏の慶長十七年版や、私の所持する江戸時代初期刊本(奥に於洛陽二條通二王門町開版焉と記す)に於ては、漢字の左又は上に唐音を記載してゐる。この二つの本の唐音は、別人によつて各獨立に記入されたものと思し、一方が他方を踏襲したものではない。併し、いづれにしても、鎌倉時代以來の古臨濟曹洞系唐音に屬することは疑無い。

之に對して、後の延寶二年版「訂補聚分韻略」(毛利氏文八・度度市兵衛繡梓)・延寶八年版「廣益三重韻」(中村五兵衛重刻)・天和三年版「増益三重韻」(中村五兵衛・西村七郎兵衛開版)・元祿四年版「訂正聚分韻略」(元祿十一年版「三重韻」(林正五郎又は河南四郎右衛門梓行)等は互に同一系統に屬する本で、舊來の唐音の外に、江戸時代に入つた新しい唐音をも多量に混じてゐる。享保四年版「廣益三重韻」(栗山宇兵衛壽梓)等は、また別の一系統をなす。それらに記された唐音は、全くの國産品であり、文雄の所謂「我が吳漢の音に本づき更に唐音を作る」ものである。

我が國の臨濟宗及び曹洞宗(心越派を除く)の諸寺院に傳へられた唐音は、大體いづれも大同小異のものであり、従つて、餘り相違からぬ時代に餘り相違からぬ地方から借入されたものらしく見える。禪宗僧侶の中には室町時代に入つてから渡支した人もあるが、有名な祖師がたの往來は大部分は鎌倉時代に行はれたもので、各派禪院の傳統も大

體は鎌倉時代の間に確立してゐたものと思はれる。故に、古臨濟曹洞系唐音の起原は鎌倉時代に在り、宋末元初の頃支那の浙江地方の寺々で行はれてゐた諷經の音を傳へたものと考へておいて、大過は有るまいと思ふ。

もつとも、詳細に觀察すれば、その中にも自ら多少の方言的（又は年代的）差異と認めらるべきものが無いでもない。例へば、同じ觀音懺法を誦するにしても、妙心寺では「各各胡跪」「一切惡鬼」「作十惡業」と言ふのに對し、秋葉寺では「各各胡跪」「一切惡鬼」「作十惡業」と言ふのである。

現今、浙江地方の多くの都邑の言語では、多數の文字には文言音と白話音とが區別されてゐる。即ち、一字に二つの音が有つて、讀書にはすべて文言音を用ゐる、白話音は専ら談話にのみ用ゐられる。但し、談話の中でも、幾分文語めいた高尚な用語にはやはり文言音が用ゐられるのである。而して、文言音は概して官話に近い特色を持つてゐる。例へば、音節の頭音について見ると、白話音が微母に〔m〕を用ゐる日母に〔m〕等の鼻音を用ゐるのに對して、文言音は微母に〔v〕を用ゐる日母に〔m ts ts'〕類の音を用ゐる。これらの點について、我が古臨濟曹洞系唐音はどうかと言ふと、まづ、微母は一般にバ行音で現れ、マ行音の形を持つ例は稀である。例を小叢林略清規にすれば

萬・物・晚・文・聞・尾・無・望・味・微

日母は一般にザ行の形で現れ、ナ行の形を持つ例は稀である。

若・日・仁・仍・如・而・入・人・然・二・燕・讓・染・稔・遶

即ち、我が古臨濟曹洞系唐音は、音節の頭音に現れた特色に於ては、現代浙江方言の文言音の方と一致してゐるわけである。

併しながら、古臨濟曹洞系唐音は、韻形の方から言ふと、寧ろ、現代浙江方言の白話音の方に近い特色を示してゐる。

る場合が多い。例へば、江・蟹・山・效・假・咸諸攝の開口二等は、文言音では官話と同様に拗音化してゐるのであるが、古臨濟曹洞系唐音は、原則としては、白話音と同様に直音を現してゐる。

咸・遐・覺・學・界・鑑・解・下・監・間・交・家

又、梗攝一等に於て

更・行・衡・宏・生・革・厄・澤・獲・伯・百・格

のやうにアン（入聲ア）韻が現れ、曾攝の一等

楞・等・燈・登・能・增・僧・恒・亘・德・特・得・勒・刻

と區別されてゐることも、白話音の方と似てゐる。文言音では、官話と同様梗攝の開口二等は一般には曾攝の開口一等（牙喉音では時として梗曾攝の開口三四等）と同音になつてゐるのである。次に、古臨濟曹洞系唐音に於ては、蟹攝の合口一等は

回・外・會・内・退・昧・埋

の如くウイ・オイ韻を現し、止攝の合口音

惟・隨・位・輝・爲・垂・巍・歸・威・韋・鬼・違・規・彙・水・類

及び蟹攝の合口四等

慧・桂・歲

と（少くとも牙喉音の場合には）區別されてゐる。これ亦白話音の特色と一致するものである。文言音では、官話の場合と同様、止攝の合口音及び蟹攝の合口四等は、蟹攝の合口一等と同音になつてゐる。又、古臨濟曹洞系唐音では、

諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態

果假攝の開口三四等は

野・伽・者・捨・謝・迦

の如くヤ韻になつてゐる。現代の浙江諸方言に於ては、文言音は一般に官話と同様なる韻を現し、之に對して、白話音は一般にエ韻を現してゐる。それ故、古臨濟曹洞系唐音は、この點に於ても白話音の方に近いわけである。

かやうに觀察し來れば、我が古臨濟曹洞系唐音と、現代浙江諸方言の文言音・白話音との關係は、なかなかむづかしい問題である。禪宗が我が國に傳へられた頃の浙江地方は、宋室の南渡に伴ひ新しい支配階級の一群が北方から移つて來て以來未だ久しからざる時代のことである故、方言的階級的に見てかなり複雑な言語状態に在つたことは、想像するに難くない所である。それらの事情をも考慮に入れて、なほ慎重に研究しなければならぬ。但し、全體として、古臨濟曹洞系唐音の支那原音が現代浙江諸方言（吳方言の一部）と全然別系統のものに非ることは、認めてよいと思ふ。

我が古臨濟曹洞系唐音は、傳來以後數百年の久しきに亘つて傳誦され來つたものであるから、その間には轉訛も少からず生じてゐることと思はれる。例へば後・后・厚の類がヨオ（通例ヨウと書いてある）と呼ばれることの如きは、普通の漢音・吳音と餘りに相違してゐるので、誰しも不思議な音と思ふであらうが、これらの文字の現代浙江音が、寧波 [nev] 温州 [nan] 金華 [hen] 永康 [han] であり、これらの明代の官音が利瑪竇や金尼閣によつて hen と寫されてゐることを知る者にとつては、何ら驚くに足ることではない。古來吳方言に於て匣母の頭音 [ɣ] が極めて微弱に發音されること（胡亂・和尚・下火等の如く）は、人のよく知る所である。それ故、鎌倉時代に我が國に傳へられた當時の形は恐らくエウ（支那原音は恐らく [veu] 又は [van]）であつたのが、ちやうど「受ケウ」が「受キ

「オ」に變じたのと同様に、いつしか訛つてヨオとなつたものであらう。これは、決して後・后・厚の場合だけに限つたことではない。侯韻がヨオの韻形で現れることは、古臨濟曹洞系唐音に於ては一般に通ずる原則である。例へば、垢・口・斗・頭は各キョオ・キョオ・チョオ・チョオの形になつてゐる。これらも傳來當初にはケウ・テウの形であつたに相違無い。(因みに、黄檗唐音はヘウ・ケウ・テウである。)

併しながら、古臨濟曹洞系唐音の特色の中には、よくその傳來時代に於ける國語の音韻状態を反映してゐるものが少くない。例へば、禪宗語彙の中には、知客・直歲・竹篋のやうに、支那原音の舌上音をサ行の形で傳へてゐるものがある。宏智正覺禪師のシも同様である。これらは普通の漢音・吳音ではタ行の形(チ・チク等)になつてゐる場合であるから、事情に通じない人は單なる偶發的な轉訛のやうに軽く考へるかも知れない。ところが、禪宗寺院で行はれてゐる諷經の唐音を見ると、舌上音に於ては

知・鎮・智・敕・中・湛・珍・轉・澤・茶・霽・程・逐・棹・超・長師

(小叢林略清規)

のやうに、寧ろサ行の形の方が原則的である。稀にタ行の形になつてゐる例は偶漢吳音の影響を受けた場合に過ぎないのではないかと思はれる。(右の四つの例外の中、逐・日・は、小叢林略清規ではチ・ジとなつてゐるが、既述の圓覺寺の諸回向集ではシ・ユン・ジとなつてゐる。又頓超は、小叢林略清規ではツン・チ・ヤウと振假名してあるが、諸回向清規式や圓覺寺の諸回向集ではツン・ヂ・ヤウと連濁してゐるので、小叢林略清規の場合にも、或は濁點が略してゐるのかも知れない。)濁音の場合には、江戸時代にはジ・ズ・ヂ・ヅとの音韻上の區別が既に失はれてゐるので、その時代に記録された諷經の唐音は、資料としては大して役立たない。

住・持・傳・值・仗・塵・丈・除・厨・長增  
(同)

併し、傳がゼンとなつてゐる點には注意すべきである。又、室町時代の辭書類では、火箸<sup>カサジ</sup>は、すべてシの濁（チの濁でなく）を以て表されてゐる。故に、濁音の場合にも、恐らく、本來は清音の場合と同様な状態だつたのではないかと想像される。

かかる現象の起つた理由については、かつて音聲學協會報第四十七號所載拙稿「唐音に反映したチ・ツの音價」の中に説明しておいた。即ち、知・徹・澄諸母は、古くは〔チ・ツ〕類の單純な破裂音であり、その端・透・定母と異なる所は、ただその調音位置が稍後方に存する點に在つた。併し、宋代の間に、知・徹・澄母はアフリカタ化して〔チ・ツ〕となり、その結果、正齒音系の照・穿・牀母と同音になつた。従つて、宋末元初頭の支那語では、知・徹・澄母はアフリカタ〔チ・ツ〕の状態に在つたわけである。然るに、日本語のチ・ヂ・ツ・ヅの音は、當時は未だ後世のやうな〔tʃi tʃi tsu tʃu〕にはなつて居らず〔tʃi tʃi tsu tʃu〕に近い状態に在つた。それ故、鎌倉時代の日本人の耳には、〔tʃi〕〔知〕〔ʃuŋ〕〔中〕〔tʃy〕〔箸〕のやうな支那音は、チ〔tʃi〕チュン〔tʃuŋ〕チ〔tʃi〕よりは、寧ろシ〔ʃi〕シュン〔ʃuŋ〕シ〔ʃi〕の方に近く聞えたものと考へられるのである。

齒音系統に屬する祝聖・普請<sup>ニユウシツ</sup>・椅子<sup>イ</sup>・帽子<sup>カピ</sup>の祝〔tʃi〕請〔ʃi〕子〔ʃi〕の類が、チュウ・チン・ツとならずしてシウ・シン・スとなつてゐるのも、やはり同じ理由によるものである。禪宗寺院の諷經の音でも、齒音系統の音は、その支那原音が單純摩擦音たるアフリカタたることを聞はず、すべてサ（ザ）行の形で傳へられてゐる。

之に對して、例へば土地堂<sup>ツチヂョウ</sup>・都聞<sup>ツクブン</sup>・都寺<sup>ツクシ</sup>・聽叫<sup>チンケウ</sup>などの如く、支那語のニ・シ類の音には、常にチ・ツが充てられてゐる。その結果、諷經の唐音にも、左のやうな面白い對立が現れてゐる。

帝（チ）

ニ

知（シ）

シ

頂 (チン)	tu	證 (シン)	ti
都 (ツ)	tu	祖 (ス)	tsu
東 (ツン)	tun	總 (スン)	tsun
頓 (ツン)	tuan	尊 (スン)	tsuan

古臨濟曹洞系唐音の輸入された時代、即ち大體鎌倉時代の頃、國語のチ・ツの音價が、未だ〔tsi〕〔tsu〕には遠く、寧ろ〔tɕi〕〔tɕu〕に近いものであつたといふことをよく立證してゐる。

右の知客・竹篋・直歲・火箸・祝聖・普請・椅子・帽子・土地堂・都聞・都寺・聽叫等の語の唐音讀みは、何れも室町時代の辭書類に既に見えるものである。さて、次には鎌倉時代の文獻から材料を拾つてみよう。

我が國に最初に禪宗を傳へた榮西禪師の歸朝は、建久二年のことであつた。而して知客の唐音讀みは、仙覺の萬葉集註釋卷一(文永六年)に既にその證を見出し得るものである。又、大體蒙古襲來頃の作と推定される塵袋には、畜生の宋音をシクサンと記してゐるので、第十三世紀末にはチは未だ〔tɕi〕に近い音であつたことが證明される。又、その第十二卷に建治元年北條實時の奥書ある保坂潤治氏所藏名語記には、當時支那で紙錢を會子と言ひ之をウイスと讀んでゐたといふ、歸朝者の談を載せてゐる。鎌倉時代の頃日本語のツが未だ〔tɕi〕に近い音であつたことを證するに足る。

次に、興味ある問題は、古臨濟曹洞系唐音に日本語のハ行音が如何に反映してゐるか、といふことである。

試みに、妙心寺派の小叢林略清規に就いて、諷經の唐音に曉母(支那原音〔ɕ〕)の頭音が如何に反映してゐるかを觀察してみると、

希<sup>キ</sup>・虚<sup>キ</sup>・虎<sup>ク</sup>・海<sup>カイ</sup>・昏<sup>コン</sup>・獻<sup>ケン</sup>・訶<sup>コ</sup>・火<sup>クワ</sup>・化<sup>クワ</sup>・花<sup>クワ</sup>・華<sup>クワ</sup>・航<sup>カウ</sup>・向<sup>キウ</sup>・香<sup>キウ</sup>・興<sup>キウ</sup>

のやうに、大部分はカ行の形で傳へられてゐる。然るに、一方には少數ながら

凶<sup>フウ(フウ)</sup>・輝<sup>ヒ</sup>・虚<sup>ヒ</sup>・熏<sup>ヒ</sup>・勳<sup>ヒ</sup>(勳<sup>古</sup>文)・脱<sup>トク</sup>

のやうに、ハ行の形で傳へられてゐる例の存することには注意すべきである。(虚は、場所によつて、キともヒとも讀まれてゐる。)然らば、支那原音の「<sup>三</sup>」は、如何なる條件の下に於て、ハ行の形を古臨濟曹洞系唐音の上に現すのであらうか。

そこで、「<sup>三</sup>」の字書により、右の各文字の現代北京音及び寧波音・温州音を調べて見ると、

	北京	寧波	温州
凶	hsiumg	hsiumg	hsioa
輝	hui	hwci	hi
虚	hsit	hi	hi
熏勳	hsim	hsing	hsimg
脱	huang	hwong	hsioa

右の中、北京音の *hsiumg* に於て、こに於ける唇の圓みが「<sup>一</sup>」の方にまで影響し、*hsiumg* に近く發音されることは、自然のなり行きである。故に、Karlgren 氏は之を *-uang* と轉寫してゐる。又、同様の事情は温州音の *hsimg* の場合にも存在するものを見え、趙元任氏は之を「<sup>一</sup>」と轉寫してゐる。

さて、かやうに見て來ると、古臨濟曹洞系唐音にハ行の形を現してゐる字は、温州音に於て、すべてその頭音の直

後に〔ㄨ〕類の母音を持つてゐるわけである。そこで、假に宋末元初頭の浙江音にも既に同様な事情が存在したものとせば、問題は容易に解決されるわけである。

ところで、北京・寧波・温州の三方言が共に〔ㄨ〕類の母音を含んでゐる凶・虛・熏・勳の場合には、その〔ㄨ〕が相當に古い時代から既に存在したものであらうといふことは、想像するに難くない。併し、〔ㄨ〕がただ温州音にのみ有つて北京音や寧波音に無い輝・呪の場合には、温州音の〔ㄨ〕は比較的近い時代に發生したのもかも知れない、といふ疑も起らう。けれども、既に本來合轉の三等字（従つて拗音にして同時に合口音）である。且、假に宋末元初頃浙江地方で行はれてゐた諷經の音に於て既に *huang, hwang* のやうな形であつたものとせば、それが日本人によつてヒヤウのやうな拗音で模倣される筈は無い。古臨濟曹洞系唐音の支那原音は、恐らく [hʷaŋ] 又は [hʷəŋ] に近いものであつたと想像されるのである。

次に問題となるのは、輝の場合である。然るに、古臨濟曹洞系唐音に反映した支那原音が、止攝の合口の場合、即ち現代北京音の〔ɛi, ɛi〕韻に對應する場合に、まさしく〔ㄨ〕韻を持つてゐたといふ事實は、面白い方法によつて證明される。

第一、古臨濟曹洞系唐音に於ては、魚韻三四等の字は、原則としてイ韻になつてゐる。

諸・書・預・於・如・去・炬・處・踞・除・序・居・舒・舉・遽・虛・御

これらが近代官話の初期に於てすべて〔ㄨ〕韻であつたことは、中原音韻・洪武正韻の反切や西儒耳目資の羅馬字綴の示す所である。その〔ㄨ〕は、cardinal の頭音の後では〔ɛi〕に變化したが、牙音・喉音・齒頭音・半舌音に於ては、現代北京音もなほ〔ㄨ〕韻を保存してゐる。さて、趙元任氏の「現代吳語的研究」に據ると、温州・寧波・紹

興・上海・蘇州その他現代吳方言の大部分も、(少くとも牙喉音の場合)ここに〔ㄨ〕類の韻を現してゐる。それ故、古臨濟曹洞系唐音のイ韻も、やはり支那原音の〔ㄨ〕韻を反映するものであつたといふことは、可能なことである。

第二、古臨濟曹洞系唐音に於ては、止攝の合口音(唇音を除く)も亦原則としてイ韻である。

惟・隨・位・輝・爲・垂・巍・歸・威・韋・鬼・違・規・彙・水・類

これらは、近代官話では〔u, u:〕韻であるが、温州・寧波・紹興・上海・蘇州その他現代吳方言の大部分(白話音)は、(少くとも牙喉音の場合)ここに〔ㄨ〕類の韻形を現してゐる。今から百四十年前、嘉定の錢大昕は、既に「吳中方言、鬼如<sup>レ</sup>舉、歸如<sup>レ</sup>居、跪如<sup>レ</sup>巨、緯如<sup>レ</sup>喻、虧如<sup>レ</sup>去平聲、遠如<sup>レ</sup>瞿」云々(十駕齋養新錄卷五「聲相近而譌」と言つてゐる。前條の魚韻の場合のことをも思ひ合せるならば、古臨濟曹洞系唐音のイ韻も、此の場合支那原音の〔ㄨ〕韻を反映するものであつたといふことは、可能なことと思はれる。

第三、かく言つても、一部の人々はなほ、古臨濟曹洞系唐音の惟・輝・歸等は支那原音〔u〕〔hu〕〔ku〕等の不完全な模倣に過ぎないのではないか、と疑ふかも知れない。併し、その然らざること、古臨濟曹洞系唐音が、蟹攝一等の合口音を

回・外・會・内・退(・昧・埋)

の如くウイ(オイ)韻で傳へ、止攝の合口音のイ韻と明瞭に區別してゐることによつても知られるのである。現代吳語系諸方言の白話音でも、蟹攝一等の合口音はすべて〔nai, nei, ne, ni, vai, ai〕類の韻形であり、〔y〕類の韻形を有する止攝の合口音とは區別されてゐる。この兩資料の一致は、決して偶然のことは考へられない。従つて、宋末元初頃浙江地方で行はれてゐた諷經の音に於ても、止攝の合口音は、蟹攝一等の合口音〔nai, ni〕類の韻形)と

は區別された〔v〕韻であつたものと考ふべきである。

第四、古臨濟曹洞系唐音に於ては、疑母（頭音は本來〔v〕）の音は、或は方行の形で現れ、或は頭音消失してア行の形になつてゐる。

礙・我・餓・眼・願・月・五

然るに、その一部がナ行の形で傳へられてゐることは、注意すべきである。

言・仰・嚴・儀・詣・隅・遇・虞・蕪・孽・業・牛・御

これは、言ふまでもなく、その支那原音に於て、本來の頭音〔D〕が、〔i〕〔ie〕〔ien〕〔iang〕〔iu〕〔v〕の如き韻へ接続して行く場合、口蓋化註三一されて〔v〕に變じてゐたことを示すものである。〔i〕〔v〕要素の直前に於ける疑母頭音の口蓋化は、近代吳方言の顯著な特色の一である。陶宗儀（浙江省黃巖の人）も、書史會要（洪武九年自序）に於て、宜の字を日本語の「に」の音に充ててゐる。

然るに、古臨濟曹洞系唐音では、巍註三二までがvの音になつてゐる。その支那原音に於て、もし止攝の合口音が、〔ui, nai〕類の韻形であつたものとせば、巍の音は當然〔ui, nai〕の類なるべく、これでは頭音〔D〕が直ちに口蓋化される筈が無い。止攝の合口音が〔v〕韻であつたればこそ、巍〔Dv〕の頭音は、魚韻の御〔Dv〕等の場合と同様に口蓋化されて、〔Dv〕即ちvの音になり得たのである。

然らば、古臨濟曹洞系唐音に於ける輝註三三の支那原音も、〔hui, hui〕の類ではなくて、當然〔hv〕であつたものと考へられる。

ところで、〔v〕の直前の〔h〕は、略〔v〕と同じ口形を以て發音され、結局は無聲の〔v〕音である。然るに、

無聲の〔h〕音に於ては、前舌部の隆起によつて口腔の中央線に集中された息が、圓く突き出された唇の縁へ吹きつけられることとなるので、動もすれば口笛に似た響を兩唇の間に生じ易い。この響は、兩唇の間に生ずる摩擦に基くものたる點に於て、また幾分に〔ɸ〕に似た性質を持つてゐる。そこで、明代の支那人は、ヒル（晝）に虚露。虚路を充てヒガシ（東）に熏加。薰加を充て、ヒゲ（鬚）に薰計を充てるなど、日本語のヒ（當時〔ɸ〕の音價を有した）の音を表すのに、〔ɸ〕〔ɸ〕〔ɸ〕の原音を有する漢字を以てすることがあつた。陶宗儀が書史會要に於て「へ」に靴の字を充てたのも、やはり同じ理由によるものと考へられる。（「へ」に充てられた靴の支那原音は、恐らく〔ɸ〕に近いものであつたらう。）然らば、鎌倉時代の日本人が、〔ɸ〕〔ɸ〕の如き支那音を聽いて、それを母國語の〔ɸ〕と同一視したといふことも、やはり同じ事情によるものとして説明されるわけである。

もつとも、支那原音の〔ɸ〕〔ɸ〕〔ɸ〕が古臨濟曹洞系唐音に「ヒ」「ヒー」の形で反映することは、常に絶對規則的に行くものとは限らない。凶・熏註三三・勳（助）・旣などは大多數の資料を通じて皆ヒヨウ・ヒン・ヒン・ヒヨウの形になつてゐるし、輝も大體はヒであるが瑩山清規等にはキとなつてゐる。虚は、小叢林略清規では偶ヒの音が出てゐるけれども、これは實は妙心寺關係の資料の中でさへも稀な例であつて、普通はキの音である。虚堂智愚禪師の名もキダウと言ふのが讀み癖になつてゐる。之を全體として見れば、古臨濟曹洞系唐音註三四に於ては、曉母はカ行の形で現れるの原則とし、それが稀にハ行の形で現れるのは、支那原音が頭音の直後に〔ɸ〕類の要素を含んでゐた場合に殆ど限られてゐる、といふことが言ひ得るのみである。

之を江戸時代に輸入された唐音の場合と比較するに、江戸時代には支那語の曉母は殆どすべてハ行の形で借入されてゐる。之に對して、鎌倉時代に借入された唐音に於ては、曉母は原則としてはカ行の形になつてゐる。

<sup>註三五</sup>  
 虛・海・勳・昏・獻・訶・火・化・花・華・向・香・興  
 虛・海・勳・昏・獻・訶・火・化・花・華・向・香・興  
 (黃檗清規)

(小叢林略清規)

鎌倉時代に於て、國語のへ行の頭音が、未だ〔ハ〕には遠く、明瞭な唇音であつたことを知るべきである。

因みに、黃檗唐音に於ては、支那語の重唇音は

八・拜・保・祕・品・表・普・邊・波・本………

のやうに半濁音バ行を以て代表され、支那語の輕唇音は

法・返・範・敷・福・風・方………

のやうに清音フ行を以て代表され、兩者は截然と區別されてゐる。之に對して、古臨濟曹洞系唐音では

八・拜・保・祕・品・表・普・邊・波・本………

(重唇音)

法・返・範・敷・福・風・方………

(輕唇音)

のやうに、支那原音に於ける唇音の輕重を區別せず、兩者を共に清音へ行の形で傳へてゐる。而して、その發音は國

語の普通のへ行音と變り無く、ただ

東方持國天王 南方增長天王 西方廣目天王 北方多聞天王 天界列位 護法諸天三界萬靈十方至聖 日月兩宮  
 天子 南北二斗星君 南方火德星君火部聖衆  
 (花園校本陳白)

に於ける北(重唇音)・方(輕唇音)の發音の示す如く、撥音の直後では半濁音に發音されるのが例である。

鎌倉時代に於ける國語のへ行の頭音(主として語頭に存した)は、確かならば明瞭な唇音であつた。併しながら、それがなほ上代の〔ハ〕の音價を保存してゐたことは考へられない。何故なら、慈覺大師が梵音〔ハ〕を日本語のハと同

諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻狀態

一視せず、特に加ニ唇音一(在唐記)ヲ註してゐることにより語頭のハの頭音が平安時代初期に於て既に〔F〕の状態に達してゐたことを知り得るのみならず、僧安覺のフデ(筆)の發音を羅大經が分直(鶴林玉露)と寫してゐることにより、語頭のフの頭音も亦鎌倉初期には既に〔F〕になつてゐたことを知り得るからである。更に、古臨濟曹洞系唐音が凶・輝・虛・熏・勳・既等の曉母の字の音を「ヒ」「ヒー」の形で傳へてゐる事實を思ふならば、當時とが未だ〔p〕の状態に在つたものとは到底考へられない。即ち、既に〔F〕の状態に達してゐたものと考へるより外は無い。而して、閉母音たる〔i〕〔e〕の前に於てすら〔p〕が既に〔F〕に變化してゐたものとすれば、一層開いた母音〔o〕〔u〕の前に於てはなほ更のことである。(もつとも、撥音や促音の直後など、特定の位置に於て當時〔i〕が發音されたといふことは有り得べきことであつて、それまでを否定するのではない。)

最後に一言しておきたいのは、字音尾の鼻音のことである。古代支那語は、韻尾の鼻音として〔m〕〔n〕〔ŋ〕の三種を區別してゐた。古臨濟曹洞系唐音は、その〔m〕〔n〕〔ŋ〕に相當する所には、區別無く常にンを現してゐる。併し、古代支那語の〔ŋ〕韻尾に相當する所には、或はンを現し、或はウを現してゐる。今、試みに實例を小叢林略清規に求めてみると

(通攝一等) 動・總・同・鴻・功・蒙・聰・通・空・洪・貢・東・董・工・幢・送・夢

(通攝二三四等) 諷・崇・中・龍・風・重・豐・松・隆・容・奉・供・衆・誦・種・恭・宮・融・凶・羣・用・熊・充・共・終

(江攝) 雙・降

(宕攝) 祥・剛・向・量・皇・康・長師・長增・望・方・莊・相・章・王・養・掌・丈・兩・既

當・昌・常・光・滄・朗・陽・堂・賞・象・坊・旺・將・往・廣・讓・藏・宥・想・揚・仗・場・障・良・航・蕩・香・仰

(梗攝) 經・頂・明・聖・永・寧・成・更・靜・行・慶・情・靈・令・正・平・病・星・興・井・生・定・淨・衡  
命・昇・宏・盛・請・輕・城・名・性・傾・程・境・清  
(曾攝) 勝・增・燈・楞・榜・登・乘・憑・等・稱・仍・拯・能・弘・僧・證・恒・亘

即ち、通攝一等及び梗・曾兩攝は原則としてシを現し、江・宕兩攝は原則としてウを現し、通攝二三四等に於てはシとウと殆ど相半してゐる。これについて思ひ合せられるのは、現代杭州方言の状態である。ここでは、本來の〔ɛ〕〔ɔ〕系統の韻尾は、山・咸兩攝に於てはその直前の母音を鼻音化して自らは消失して居り、臻・深兩攝に於ては〔ɔ〕の形で保存されてゐる。之に對して、本來の〔u〕系統の韻尾は、〔ɛr〕〔ɔr〕〔ue〕〔ur〕のやうに、直前の母音の性質に應じて、或は〔ɛ〕の形で或は〔u〕の形で、保存されてゐる。その結果として、本來の〔ɛ〕系統の韻尾は、大體に於て、通・江・宕諸攝に於ては〔ɛ〕の形で保存され、梗・曾兩攝に於ては〔ɔ〕の形で保存されてゐることとなつてゐる。宋末元初頃、浙江地方に於ける諷經の音に、もし何か之に類似した事情が存在したものとすれば、古臨濟曹洞系唐音に現れたウとシとの使ひ分けも、都合よく説明されるわけである。即ち、古臨濟曹洞系唐音の韻尾ウは、その支那原音の韻尾〔u〕を反映し、古臨濟曹洞系唐音の韻尾シは、その支那原音の韻尾〔ɛ〕（或は〔ɛr〕）を反映してゐるものとして説明されることとなる。もつとも、通攝の場合の事情など、詳しいことは未だ分らないけれども。

古臨濟曹洞系唐音に於ける韻尾のウとシとの使ひ分けを、右の假定によつて説明せんがためには、鎌倉時代に於ける

る國語の發音の本體が、「コ」よりは寧ろ「ク」の方に近いものであつたことを前提としなければならぬ。然るに、ここに一つ、その可能性を多からしめる事實が存在する。即ち、諷經の唐音に於ては、字音尾のシの直後にア・ワ・ヤ三行の音が來る場合には、謠曲等に於けると同様な連聲を生ずるのであるが、その際、シの後に來るア・ワ・ヤ三行音は、そのシが本來喉内・舌内・唇内いづれの系統に屬するものであるかを問はず、すべて無差別にナ行音となる。(更に詳しく言へば、ア行音・ワ行音はナ行音に變じ、ヤ行音はニヤ行音に變ずる。) 左に花園校本「觀音懺法」の中から若干の例を引かう。

(喉内) 供養キョウヤウ 畜生形シユシヤウ 不能爲害フボトイガイ

(舌内) 諸天音樂シユテンイキク 諸天肴饌シユテンヤウゼン 外近惡人ガイキンアジン 輪廻リンフイ 輪還リンフイ

(唇内) 我今已具ゴケンイキク 發菩提心行菩薩道ハツブツシンアンフサクダウ 三惡道サンアダウ

この種の連聲は、支那語に存在するわけではなく、無論日本の寺院で傳誦される間に生じて來たものである。その状態は、上に來るシの起原の如何を問はず、下に來るア・ワ・ヤ行の音をナ行・ニヤ行の音に變ずる點など、すべて謠曲等の場合と同一であつて、格別珍しいところは存在しない。併し、それにしても、謠曲の連聲などと共に、かつてシの音韻論的本體が舌尖音〔ク〕であつた時代の存在することを暗示するものとして、注意すべき事實と言はなければならぬ。

以上、舌臨濟曹洞系唐音に關する考察は、主として妙心寺派の諸文獻についてなしたものであるが、事情は他派の資料についても大差は無いやうである。禪宗諸寺院に於ける諷經の唐音を組織的に研究することは極めて大切なことで、その光に照してこそ個々の唐音語の性質も始めて明かになるのである。例へば、火箸カサシのシ註三五(著)などは、事情を

知らない人にとつては全く不可解な音で、甚だしい轉訛のやうに思ふであらうが、「古臨濟曹洞系唐音に於て、(一)知・徹・澄母はサ行・ザ行の形となり、(二)魚韻三四等はイ列音となる。」といふ原則を知る者にとつては、これ全く「音韻法則」的な形であつて、理論的に演繹し得るものである。又、請客侍者の請(現代北京音 *tsing*) はシンと撥ねるのに、湯藥侍者の湯(現代北京音 *tan*)は何故タンと撥ねないのか。唐音とし言へば何時でも撥ねるものやうに心得てゐる人々にとつては、全く解しかねる所であらうが、「古臨濟曹洞系唐音に於て、梗攝は撥ね、宕攝は撥ねない。」といふ原則を知る我々にとつては、日常茶飯事に屬する。和尚をラシャンと撥ねないのは、尙(現代北京音 *ʃan*)が宕攝の字だからであり、行脚をアンギヤマ撥ねるのは、行(現代北京音 *ʃing*)が梗攝の字だからである。又、羊羹(ヤウカン)の羊(現代北京音 *jan*)は宕攝の字、羹(現代北京音 *kan*)は梗攝の字である。但し、これらの法則の適用範囲は、無論、鎌倉時代に輸入された古臨濟曹洞系唐音に限られてゐる。室町以後、殊に江戸時代に輸入された新しい唐音には適用されない。

私は、本稿を端緒として、一層廣く一層詳しい研究を此の方面に進めたい所存である。ついでには、何なりとも有益な資料を御存じの方は、もし御教示下さるならば幸の至である。

私が唐音の研究に志して以來、橋本進吉先生並に中山久四郎先生からは常常懇ろな御教をいただいてゐる。又、駒澤大學圖書館の藏書を借覽することを得たのは、大久保堅瑞先生の御厚意によるものである。此の稿を終ふるに當り、諸先生に厚く御禮申し上げる次第である。

## 註

- (一) 丙刀は、大正新修大藏經には丙丑と改めてゐるが、丙丑といふ干支は有るべからざるものであるから、いづれ何かの誤に相諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態

違無い。楓隱自身が間違へたのかも知れない。もし乙丑ならば永祿八年、丙寅ならば永祿九年である。

(二) 楓隱の傳は明かでない。瑞石山永源寺宗派圖(大正十四年刊)にも、ただ未詳師承者追考(自應永元年甲戌至元祿十六年癸未)の中に天倫寺楓隱と記してゐるのみである。

(三) 明曆版は、龜井孝氏の藏せられるものを拜借することが出来た。深く感謝する次第である。

(四) 附録を削除したので、それに相應するやうに目録をも書き改めたのである。なほ、明曆版では、附録の最後に諸回向清規式卷第五終と記し、その後、明曆三年梓行の刊記がある。然るに、友松堂版では、その諸回向清規式卷第五終の文字をも一緒に削つてしまつたので、卷第一乃至卷第四の場合に比べると、形式が不備になつてゐる。何れの點から見ても、明曆版の方が原形であつて、友松堂版はその一部を變改したものであること明かである。

(五) 謠曲朝長は、世阿彌の作として大永四年吉田兼持在判の能本作者註文の中にも既に見える古い曲である。その中に引かれた

觀音懺法の文は、現今の觀世流に據れば

吾今三點楊枝淨水唯願薩埵

となつてゐる。喜多流や金剛流では吾今已具となつてゐるが、これは觀世流の方が正しい。今、懺法の本文及び唐音を花園校本に據つて引けば、

我今已具楊枝淨水惟願大悲哀憐攝受

我今再獻楊枝淨水惟願觀音哀憐攝受

我今三點楊枝淨水惟願薩埵哀憐攝受

秋葉寺藏版本に據れば、唐音が少し違ふ。

我今已具楊枝淨水惟願大悲哀憐攝受

我今再獻楊枝淨水惟願觀音哀憐攝受

我今三點楊枝淨水惟願薩埵哀憐攝受

面白いことには、懺法原文の我今は、謠本では、江戸時代に於ても多くは吾今となつてゐる。これは、言ふまでもなく、我今をゴキンと唐音讀みにする所から、誤つて吾今の文字を用ゐるに至つたものである。兎に角、唐音のお經が謠曲の中に引かれてゐるのは珍しい例で、藤戸や項羽に出て來る般若理趣經の漢音と共に、注意せらるべきものである。

(六) 近世初期の寫本。表紙に「懺摩法 南嶺和尚眞跡」と記し、終に近人の筆を以て左のやうに記入してある。

南嶺和尚略傳 曹洞宗

薩摩福昌寺禪僧なり、慶舜字は南嶺姓は源氏大寺の族なり、大麟全索に參して分座となり慶長十二年薩摩福昌寺の虛席するに當り師州守の請に依りて之に住す、元和元年正月十四日寂す、法嗣三了麟達の一人あり

日本洞上聯燈錄

(七) 重鐸觀音懺摩法引

洛師創生林氏嘗刊二大悲懺二而行于三世一尚矣舊梓湮蝕而音律或舛謬有志于修持二者憐焉而今託レ余議三再鐸二余乃就二乎龍泉前住牧公和尚二刪補之翻刻流通伏願懺雪廣修永銷二障霧之擾擾一聞薰普發同登二薩雲之巍巍二

時享保十五歲隱庚戌四月佛生日

前越州壽聖山僧馬羊和南書

(八) 敬刺

圓通懺摩經一部流行伏願皇風永扇

佛日增輝見者聞者同證圓通者

京洛 桃花街書林 林氏和南謹書

此の本には、勿論享保十五年序や明和八年跋は附いてゐない。

(九) 享保版及び寶曆版は、私は未だ見てゐない。明和版は、ただ巻首の斷片を手に入れたのみ。今ここに記す所は、明和八年跋及び明和版・寛政版巻頭の記載に據つたのである。

(一〇) 私の見ることの出來た江戸時代刊本には、題簽の剝落してゐるものが多いので、この「大乘寺讀點付」の文字が何時頃か附せられてゐたものかを知ることが出來ない。明治十一年京都府栗田東平翻刻の本や、明治十九年愛知縣木下猶之助翻刻の本には、此の文字がある。稍古い所では、文政十三年版の陳白に此の文字あるもの、及び題簽の剝落した寛政八年版の陳白の表紙に肉筆で此の文字を記入したのを見たことがある。なほ、下文陳白の條を参照せられたし。

(一一) 秋葉寺藏の文字及び明治十七年の白鳥鼎三の跋は、最近の刷本では削除されてゐる。

(一二) 此の奥書は、陳白の本の終に附いてゐるが、意は懺法の本文の方にまで係るものであること明かである。何故なら、陳白

諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻狀態

の本には晝は無く、従つて、ここに言ふ所の晝とは、本文の巻頭に在る楊柳觀音像を指すものであること明かだからである。

(一三) もつとも、これらも花園關係の本であつたかどうかは判明しない。

(一四) 梵語心經は古くから建長寺に傳へられたものと云ふ。新編鎌倉志(貞享二年刊)卷之三建長寺山門の條に曰く、「又此門下にて、七月十五日に、梶原施餓鬼と云を行ふ。相傳、昔開山在世の時に、武者一騎來て、施餓鬼會の終りたるを見て、後悔の色有て歸る。時に禪師これを見て、呼かへさせて、又施餓鬼會を設て聽しむ。時に彼武者、我は梶原景時が靈なりといひて謝し去る。爾しより以來、此寺には毎年七月、施餓鬼の會終て後、梶原施餓鬼と云を設るなり。心經を梵音にて、二三人にて誦餘の大家は無言にて行道するなり。是を此寺にて梵語心經と云なり。」と。大覺拾遺錄にも同じ語が出てある。

(一五) 聚分韻略の唐音では、何故か侯韻がエウ韻でなくて、漢音同様のオウ韻であり、その他、後に述ぶべき字音尾のウとんの使ひ分けの點などで、多少人爲的に規則化された所は有るとしても、それは古來禪宗寺院に傳へられた唐音を韻書に合せて多少整理した程度にとどまる。抑、禪宗寺院で用ゐられる祈禱や回向の文は、大體の型は古くから定まつてあるとしても、實際の場合に應じて人名や地名を入れ替へたり、内容に多少の變改を加へたりしなければならぬ。かの諸回向清規式の如きは、正にその必要から生れたもので、廣く種々なる場合に入用な文例を收載し、室町時代に於ける禪院と俗社會との交渉をよく反映してゐる。然るに、その際には自然その中に新に用ゐる文字の唐音を知らなければならぬので、それには唐音字書が必要になる。そこで取り敢へず、詩作等に使ひ慣れた聚分韻略の所々に、各文字の唐音を記入しておき、咄嗟の場合の用を辨じてゐたのが、甚だ便利である所から、後には之に多少の整理を加へて印刷に附するに至つたものであらうと思ふ。

(一六) 一方に中・知・行・杳・生・宏・請・稱・七のやうな古い鎌倉時代風の唐音が存すると同時に、他方はまた文・聞・萬・歡・煎・錢・千・前・河・火・下・霞・舍・蛇・華・楊・張・芳・呈・曾のやうな新しい江戸時代風の唐音も含まれてゐる。看・貫・扇・卷・堅・家・麻・華・宅・澤の如きは、多分他の場合に於ける漢吳音と唐音との關係から類推して想像的に作られた形であらうと思ふが、中には何か特殊の支那方言に基いたものも有るのかも知れない。(面山が火の唐音を常にホと記してゐることの如きは、古臨濟曹洞系唐音では他に例の無いことで、或はこの系統の聚分韻略の影響を受けたものかも知れない。)但し、この系統の本の唐音には、註一八に記した種類の和製唐音の場合とは違ひ、支那原音に鼻音尾も無い所にまでんを

つけるやうな出鱈目は見出されない。

(一七) 享保三年洛東隱士の跋がある。それに據ると、本書は、元祿十一年に同人の跋を附して再訂重梓した本を、この度新に校正し更に舊梓の遺脱を補つたものであるといふ。この元祿十一年版は、前に記した林正五郎(又は河南四郎右衛門)梓行の元祿十一年版とは、無論別物に相違無い。

(一八) 「辨唐音」名目云、字三伊二跳者跳、拗音入聲俱脚切聲切脚也。又云、一之レ五、二一本韻、三之レ五、四之レ二、五之レ三也。(韻鏡易解、盛典著、元祿四年刊)「一は五に、四は二に通ひ、五は三に、二三の時は本坐(へ)しぞ。」(消閑雜記、岡西惟中著)この種の説は、最初は、音韻相通の理に基き、唐音と在來の漢吳音との關係を説明しようとする要求から生れたもので、言はば音韻法則思想の萌芽とも見らるべきものである。古くは韻鏡集解切鈔(寛文八年刊)・韻鏡祕事抄(寛文十年小龜益英述)・韻鏡問答鈔(重慶著、貞享四年自序)等はその説が見える。但し、その法則の適用範圍については深い考察がなされなかつたので、之を不當に一般化する傾向があり、殊に、唐音の何たるかをも辨へない人々がその法則を濫用し、漢吳音から機械的に唐音を作り出して得得たるに至つた。右の洛東隱士が跋を書いた廣益三重韻や、文化開刊の華音韻鏡の如きは、その甚だしい例である。活きた當代の支那音に多少なりとも接した人が、かかる和製唐音に疑を挿んだのは當然のことで、重訂韻鏡袖中鈔(元祿八年刊)及び韻鏡袖中祕傳鈔(正徳五年刊)の著者毛利貞齋の如きは、その早い例であらう。文雄が「弗と知有華音之在者所爲不耐抱腹者乎」(三音正譌)と言つてゐるのは適評である。

(一九) 私は假に之を古臨濟曹洞系唐音と呼ぶ。

(二〇) 以下、吳方言に於ける文言音及び白話音の特色は、いづれも趙元任氏著「現代吳語的研究」に據る。

(二一) 官話の微母の頭音は、現代北京音では非音節的〔w〕になつてゐるけれど、稍古い時代には同じ北音系統に屬する現今の四川音などと同じく〔w〕であつた。

(二二) 假名ではケウ・テウ(テフ・チャウ・チャウ)等と記されてゐるが、要するに皆キョオ・チャオ等の音を表すものである。但し、歴史的假名遣としてはケウ・テウを採るべきものであらう。堂頭和尚・頭首・雪竇(支那地名)等の如く。ところで、禪宗寺院では住持を堂頭和尚と言ふ。寺内の事務は、首座・書記・知識・知客・知浴・知殿・侍者等の頭首方と、都寺・監寺・諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態

維那・副寺・典座・直歲等の知事方とによつて管掌される。その堂頭和尚はダウテウヲシヤウ、頭首はテウシユと言ふのが讀み癖である。然るに、雑務の諸役たる浴頭・淨頭・飯頭・供頭等の頭は、何れもヂウと讀む例になつてゐる。さて、支那原音に於ては、頭には唯一つの音（度侯切）しか無い。然るに我が古臨濟曹洞系唐音に於て右のやうにテウとヂウとの兩音を生じてゐることは、思ふに支那語に於ける發音の輕重を反映してゐるものではなからうか。即ち、堂頭や頭首の頭が明瞭なカシラといふ意味を表すのに對し、浴頭（風呂番）・淨頭（雪隠係）・飯頭（炊事役）・供頭（給仕役）等の頭は（語原的には頭首の義であるとしても）現實にはただその役を務める人を意味するだけである。堂頭・頭首に於ては頭は一語の主要部分であるが、浴頭・淨頭・飯頭・供頭等に於ては頭は寧ろ接尾辭的要素たるに過ぎない。塔頭はもと祖師の塔のある所を表す語で、その頭はホトリと言ふ程の輕い意味である。又、饑頭アツメウの頭が接尾辭たることは、言ふまでもない。かやうに意味上に輕重の差が有るのに應じて、發音上にも亦自ら輕重の差を生じ、重く讀まれる時にはテウに近く響き、軽く讀まれる時にはヂウ（チウ）に近く響いたものではなからうか。

(二三) 獨耀をツンエウ、盛禮をシンリンと言ふ風な工合に口調の加減でンを挿むことは諷經の唐音では珍しからぬことである。逐日をシュンジと讀むのも、その一例に過ぎない。逐の現代官音は *chū*。

(二四) 古くからかやうに連濁してゐたものとすれば、その室町以前に於ける原形は、ツンヂウであつたかツンゼウであつたか判明しないこととなる。

(二五) 八隅知之我大王云々……知字一音師也。假令如寺官中知客謂之師可也。 (萬葉集註釋卷一)

(二六) 宋朝ニハサハヲハ出生食ト云フ是ニヨリテ入宋ノ僧トモハ生飯ト書テサハトヨム宋朝ニ生字ヲサントヨムニヘ也人ヲノルニモシクサント云フハ畜生ト書テシカヨム也(塵袋七)。(康熙字典に曰く「六畜之畜、古俱許六反。今人並讀作昌六反。」)なほ、十駕齋養新錄卷一を参照せられたし。

(二七) 史學雜誌第四十八編第八號所載森克己氏「日宋交通と日宋相互認識の進展」に據る。

(二八) 支那人の側から日本語を觀察した例を求めて見ると、まづ、鎌倉初期の日本僧安覺(備中の人)の發音を南宋人羅大經(江西省廬陵の人)が漢字で音譯した例が、鶴林玉露人集卷四に出てゐる。その中に日本語のクナ(口)を「窟底」と記して

ゐるのであるが、「底」は端母(ㄊ)の字であるから、安覺のチは多分ㄊに近い音であつたらう。次に、元末明初の人陶宗儀(浙江省黃巖の人)は、書史會要卷八の中に、日本僧克全大用(傳未詳)から教はつた「いろは」の讀み方を記してゐる。その中に、「ち」を「啼又近低」と註し、「つ」を「土平聲又近唇」と記してゐる。その中「低」は清音のチに、「唇」は濁音のツに、「土」は清音のツに、「唇」は濁音のツに充てられたものと思はれるが、これらの文字はすべて舌頭音(ㄊㄌ)に屬するものであり、従つて克全大用のチ・ツ・ヂ・ヅは寧ろ *ts* *ts* *ts* *ts* に近い音であつたらしく思はれる。但し、此の克全の發音が果して當時の標準的發音であつたかどうかは判明しない。

(二九) 江戸時代に於ては、ヒヤウ・ヒョウの假名とヒョウの假名とは音韻的には等價であつた。既に小叢林略清規にはヒョウと振假名されてゐるけれど、ヒヤウ・ヒョウの間に音韻上の區別の有つた室町以前の時代ならば、恐らくヒヤウと書かれたであらう。

(三〇) *Giles* の字書に記された輝の寧波音 *hwet* は、系統から言へば文言音系に屬する。

(三一) 願・月のやうな本來の非音節的〔V〕の前では、疑母頭音〔ㄱ〕の口蓋化は起つてゐない。古臨濟曹洞系唐音の基礎となつた支那方言では、本來の非音節的〔V〕は、現代衢縣(浙江省西南部)方言に於ける如く、大部分消失してゐたのではなからうか。現代衢縣方言では、元先仙韻の開口牙音が〔ㄱ〕韻であるのに對して、その合口音は〔ㄱ〕韻であり、又、月唇薛韻の開口牙音が〔ㄱ〕韻であるのに對して、その合口音は〔ㄱ〕韻である。

(三二) 趙元任氏著「現代吳語的研究」聲母表參照。

(三三) 單純な〔h〕よりも〔hy〕の方が一層〔h〕に近く聞えることは言ふまでもない。熏・勳(勳)などが大多數の場合ヒンの形になつてゐるのは、その支那原音が、現代杭州音・無錫音〔yn〕又は衢縣音・常州音〔yn〕に近い韻形を有したためではなからうか。兄も、師兄・兄弟などのやうに、古臨濟曹洞系唐音では常にヒンの音である。現代衢縣音はやはり〔ㄱ〕韻を有する。虚が大多數の場合キの音であるのに對し、輝が多くはヒの音になつてゐるのは何故か。ことによると、兩者は當時はまだ完全に同音にはなりきつて居らず、虚〔h〕輝〔hy〕のやうな區別でも有つたものかも知れない。假に然りとせば、古臨濟曹洞系唐音の支那原音に於ける止攝の合口音を〔h〕韻となした上の推定は、修正を要するわけである。

(三四) 經行は、臨濟・曹洞の諸寺院に於て、現今キンヒンとして知られてゐる。併し、古臨濟曹洞系唐音としては、ヒンは隋に落

諷經の唐音に反映しだ鎌倉時代の音韻狀態

ちない音である。行は梗攝二等の匣母の字で、古い唐音語では行脚・行者・童行の如くすべてアン<sup>ア</sup>の音になつて居り、諷經の音も亦さうである。而してこのアンこそ、理論上期待せらるべき規則的な音なのである。ヒンは、どう見ても、江戸時代に入つた新しい唐音(例へば黄檗唐音では行の音はヒン又はヘン)としか思はれない。元來、經行は法華經等にも見える語で、禪宗以外ではキヤウギヤウと讀まれてゐる。禪堂に於て坐禪の間に行はれる緩歩の意に於ては、夙に榮西禪師の興禪護國論に「又飯食時、經行時、坐禪時、學問時、讀經時、眠臥時、不離衆會。」とあり、道元禪師の寶慶記にも、その師天童如淨の言として「起從坐禪、欲經行者、不得躑步、直須直歩」と見えてゐる。併し、我が國の禪家の諸清規や古代の辭書類等には、經行の唐音讀みを記したものが見當らず、従つて、キンヒンといふ音が一體いつ頃から存在したものを明かにすることが出来ない。その上、もしこれが六七百年も前に借入された語であるとすれば、その音韻的形態は既に全く日本化してゐる筈であるのに、何故かキンピンと言はずキンヒン<sup>△</sup>と言つてゐる點が、甚だ熱しきらない感を與へる。(増輝・法兄など参照)それ故、私は、このキンヒンといふ形が、果して古くから傳はつた音であるかどうかを疑ふのである。さて、慧中の「經行軌聞解」(元文三年)は、面山の經行軌を註解したもので、當時永平門下の僧侶が、とかく明朝(黄檗)の風に倣ふことを好み、宗祖の遺訓に背くことの多いことを歎じてゐる。此の書は經行を論じたものであるから、勿論經行の文字は無數に出て来るが、すべて假名無く、ただ最終の第二十三丁に至り、「ソノウヘニ速疾經行<sup>オキヒ</sup>ト名付ケテ、犬馬ノゴトクカケマハリテ、外道モセヌ様ナル非法ヲ行スルハ」といふ唯一個處に限つて特にキンヒンと振假名してある。これによつて思ふに、元文の頃には、經行をキンヒンと讀むことは、曹洞宗内に於て未だ一般には行はれて居らず、専ら黄檗好みの人々の間に漸次行はれ始めてゐた新しい讀み方ではなかつたかとも想像されるのである。

(三五) 黄檗文獻では、例へばイ(於・于・語)キ(去・居・懼)イン(云・雲・運)等の如く、イ列の假名の右肩に小圈を附することによつて「ム」母音を表すことがある。「慈悲水懺法」(寛文十年)卷末の國字旁音例の中に「凡旁音有<sup>ナ</sup>用<sup>ナ</sup>小圈於上者<sup>ナ</sup>矣如<sup>ナ</sup>ニイキ字<sup>ナ</sup>須撮<sup>レ</sup>唇舌居<sup>レ</sup>中而呼<sup>レ</sup>之也」と言つてゐる通りである。然るにまた一方では「如<sup>ニ</sup>ビ等字<sup>ナ</sup>先閉<sup>レ</sup>唇激而發<sup>レ</sup>音<sup>ナ</sup>」と言つてゐる如く、同じ右肩の小圈が半濁點としても用ゐられてゐるので、ビのやうな字形は、<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>又は<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>の何れとも解せられることとなる。黄檗清規が虚にビ又はビイと振假名してゐるのは、無論、<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>や<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>ではななくて、<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>類の音を

意味するものである。

(三六) 古臨濟曹洞系唐音の範囲では、諷經の唐音には促音が無い。右の持國天王・廣目天王・北方・列位・護法諸天・十方・日月兩宮・南北二斗・火德星君などが示してゐるやうに、入聲韻尾は原則として脱落してゐるからである。併し、現代吳方言の状態から察するに、古臨濟曹洞系唐音の支那原音に於ける入聲の消失は、未だ完全なものではなく、本來の入聲字は、少くも平上去聲字に比すれば、短促に發音されたものと思はれる。故に唐音語彙に於ては、塔頭・拂子・直歲等のやうに、その短促な發音は屢促音の形で表されてゐる。而して、その場合、促音の直下に來るハ行音は、半濁に發音されるのが例である。例へば竹篋・法兄など。(兄の唐音については註三三參照。)

(三七) 橋本進吉先生「波行子音の變遷について」(岡倉先生記念論文集)の御説に據る。

(三八) 韻尾の「[三][コ]」の區別は、宋末元初の頃、北方官話ではなほ保存されてゐた。併し、當時の吳方言ではどうであつたか、不明である。

(三九) 火箸の箸の假名遣について、大言海は、下學集(下、器財門)の「火箸」を引きながらもそれに從はず、却つて「正韻『箸、治據切、音宇』ナレバ、こぢナリ」と主張してゐるが、この論據は不適當である。何故なら、正韻は近代支那音に基いたもので、その切字には澄母と牀母との區別が無いからである。火箸の假名遣は、宜しく下學集・温故知新書・渾歩色葉集等室町時代の辭書類の記載の一致する所に從つてコジとなすべきである。

(四〇) 黃榮宗や心越派(曹洞宗)の諷經の唐音、その他江戸時代に輸入された唐音の資料については、拙稿「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」(國語と國文學昭和十三年十月號所載)の中で説明しておいた。

## 追記

異譯心經の寶曆刊本に就いて記した際、七譯の第二、玄奘譯般若波羅蜜多心經の後に、

「此本雖有宋音二傳寫久而韻聲不明故今除之」

諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻狀態

と記してあることを述べておいた。かねて橋本先生から七譯心經の古寫本が高野山に在つて、その中の一つとして、古い宋音を記したものが含まれてゐる由を承つてゐたのであるが、その後大阪の古本屋の目録に出てる異譯梵本般若心經といふものを試みに註文して見たところ、これは同書の江戸時代の寫本であつた。奥書に據ると此の本も高野山から出てはゐるが、橋本先生の御覽になつた本との系統關係は未だ不明である。現在高野山に藏せられてゐる本を、是非拜見して比較して見たいものと思つてゐるが、未だその機會を得てゐない。ここには、私の手に入れた本の中の文弊譯の部分と、全體の奥書とを出して、御參考に供する。原本には朱點を以て四聲並に句讀を註してゐるが、今は印刷の都合上省略した。只を口に誤り、イをクに誤るなど、誤寫たることの容易に知られるものも有るがすべて原のままにしておいた。なほ、校合は皆もとから有つたものである。

般若波羅蜜多心經

三藏法師玄奘奉詔譯

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊等皆空  
 度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空  
 即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空想不生  
 不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識  
 無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意  
 識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無

苦集滅道無智亦無得以無所得故苦提薩埵依般若  
 波羅蜜多故心無罣礙無所礙故無有恐怖遠離顛倒  
 夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨  
 多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神咒是大  
 明咒是無上咒是無等等咒能除一切苦真實不虛故  
 說般若波羅蜜多咒即說咒曰  
 揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提娑婆訶  
 般若波羅蜜多心經

此讀音寬治七年癸酉四月之比多峰妙樂寺住濟嚴(末)  
 傳受之件人者大宋國福州商密林通相會所傳授  
 也

般若心經 異本 奧書

御本云

建治三年七月八於小田原中正院書之賴瑜  
 寬永十二年五月廿一日於高野山西院善性院以賴

諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態

瑜自筆御本書之玄雅乘憲房

享保第七癸寅十一月廿四日於南谷寶性院輪下書之

佛化子妙瑞

寬保元年辛酉冬十二月廿日以寂明子本

寫于洛陽城三條堺街藤店畢

溟瞿君猷 但念拜

昭和十九年七月十五日 印刷  
昭和十九年七月二十日 發行

國語音韻史の研究

◎ 定價七圓八十錢

特別行爲稅相當額七十錢

合計 八圓五拾錢

(一四五〇部)

出文協承認 あ460208



著者 有坂秀世

發行者 清水達夫

東京都澁谷區大和田町四十二番地

印刷者 北川武之輔

東京都京橋區銀座四丁目四番地

印刷所 (東東六〇) 細川活版所

東京都神田區淡路町二ノ九

發行所

明世堂書店

振替東京八三九三三  
電話澁谷三八〇二  
會員番號一三四〇一一